



「フムフム」は
アイヌ語のあいづち

にじ た よう せい
虹は多様性

「フツウ」だれが決めた

札幌市では例年、9月に「レインボープライド」という行事が開かれます。LGBTQ（性的少数者）が、自分たちの存在を知らせることで、社会を変えようとするものです。

レインボー（虹）は、社会の少数派のシンボルとしてしばしば使われます。世の中は多数派の暮らし方が「フツウ」になっていて、少数派の人たちが思うように暮らす権利は忘れられがちです。でも、「フツウ」だと思っている人も、本当は虹の色のようにみんなちがって、ゆるやかにとなり合っているとも言えます。そのことを伝えるのに、虹はピッタリです。

アイヌ語では虹をラオチやラヨチといいます。虹は美しいもの、「神々のわたる橋」とされてきました。しかし同時に、不吉なものだから見たり指さしたりしてはいけない、とも言われました。同じような考え方は、アジアを中心にアフリカや

ヨーロッパ、アメリカにもあります。

アイヌのある言い伝えでは、虹はもともと女神でした。しかし、女性に期待される「ふるまい」をしなかったために地底に落ち、魔物にされてしまったと言われています。

こんなふうに、古いお話の中でだれかが「ばつ」を受けるとき、よく考えると何が悪いのか分からない、ということはめずらしくありません。先ほどの言い伝えでも、きれいなものを身につけたり、恋に積極的だったりがいけなかったとされています。その決まり、だれが決めたのでしょうか？

そう考えると、虹になった女神は「こうあるべき」という一方的な決めつけから、はみ出たということもできます。「フツウ」にしばられない生き方のシンボルとして、虹ほどふさわしいものはないように思えてきませんか。

（北原モコットウナシ）



にじ / ラヨチ

おがさわらさよ
小笠原小夜

